

特集 外傷 CT は “何のトンネル” だ？

外傷患者治療における最大の使命は救命であり、次いで機能的予後の改善があげられます。四肢の機能的予後改善も重要ですが、脳の機能的予後がこれよりも重要です。そして、脳機能予後改善にも増して、救命が求められます。

救命の要点は呼吸・循環の維持であり、そのためには、どこにどのような損傷があるのかを把握して、それをいち早く治療し改善させることが求められます。損傷を把握するためには、病歴や身体所見、検査所見が参考になり、処置と並行して施行できる画像検査としては、FAST (focused assessment with sonography for trauma) と呼ばれる超音波検査と、ポータブルでの胸部・骨盤の X 線検査が従来から行われてきました。これらの検査から治療方針に必要な情報を得ることができますが、近年では CT 機器の進歩に伴って、圧倒的に情報量の多い CT 検査を施行して治療方針を決定することが、実臨床では増えてきていると思われま

す。とくに重症外傷診療における CT は“死のトンネル”などと表現されてきましたが、近年ではショック時に CT を施行しても死亡率は悪化しないといった、重症例であっても CT を撮影することが許容される可能性を示す報告も出てきました。それがすべての重症外傷診療に適応できるのであれば、たしかに CT は“生へのトンネル”になったともいえます。

しかしながら、CT を“生へのトンネル”として診療に活かすためには、たしかに存在するデメリットに対する理解や、検査施行時のさまざまな工夫、職種の枠を越えた協力体制が求められます。では、実際どのようなことに配慮し、どのように使用すれば外傷 CT が“生へのトンネル”となり得るのか。本特集が、それを考え、各施設で実践する一助になれば幸いです。